

景勝 印旛沼

白井八景



景勝 印旛沼 白井八景

元禄十一年(二六九八) 白井の隠士 信斎(白井秀胤) 叙す

瀬戸秋月

もちこしの西の湖もかきやらん には照る浪の瀬戸の月かけ

飯野暮雲

ふり積る雲の夕を見ぬ人にかきく 飯野のこの暮まなし

遠部落雁

手も折れいひとふたつと教おれば けえ遠部に落つる雁か収

光勝晚鐘

けふも暮れぬあはれ幾世もふる 寺の鐘や昔も音に響きくらん

師戸帰帆

もちろ人の師戸の渡り行く舟の 舟かたに見えて帰る夕ぐれ

舟戸夜雨

漁する舟戸の浪の夜り雨ぬれく 也網の縄手くるま

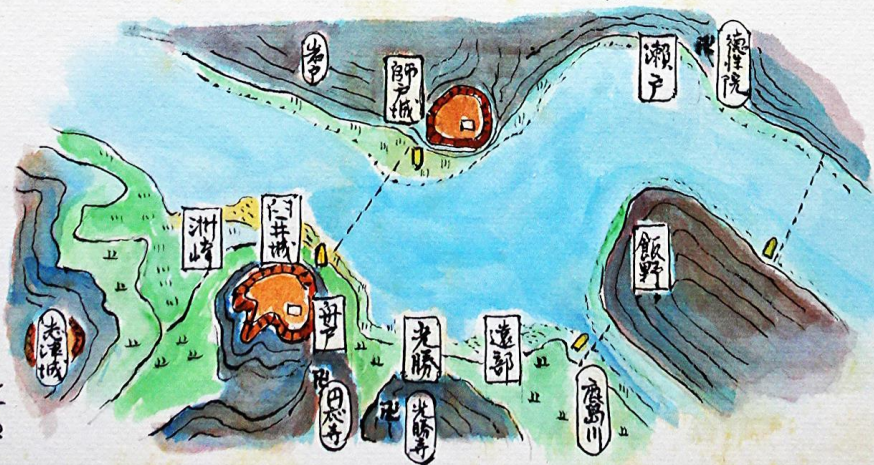
城嶺夕照

いづくへ入目と峰に送るらん むかひの遠くなれる古跡

洲崎晴嵐

ふき払ひ雲も山嵐もなかりけり 洲崎の寺の波も静かに

印旛沼図



比呂

名橋・白井景

舟戸の夜雨

漁する舟戸の浪りよる雨

ぬ水とや網の強年よる雨

信春



舟戸の夜雨
信春

名孫・白井八景

遠郡り落雁

年と折りとひらふたつとかぞふれば

みちるとまへに落つる雁が収

候音



遠郡り
白井八景
(原野川)

名孫・臼井八景

飯野の暮雪

ふり積る雪の夕べを見ぬ人ト

かくといひりこころの春もなし

信春



飯野の暮雪

北畠

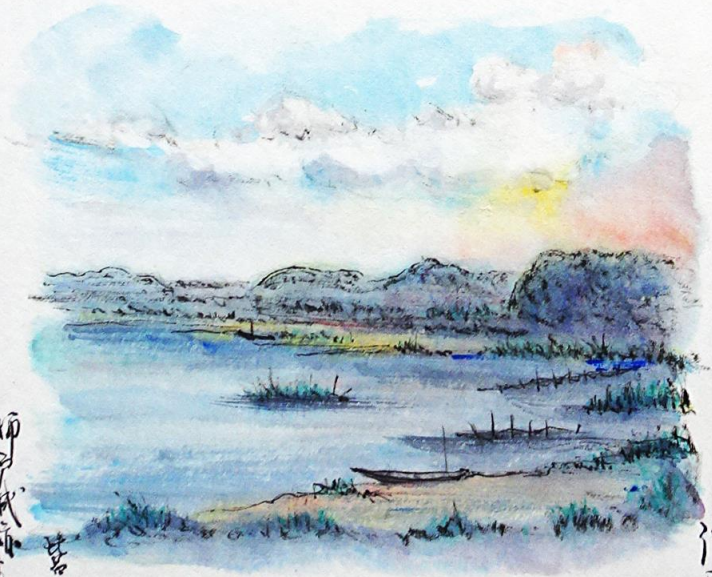
名録・臼井八景

師戸帰帆

もろ人り諸戸の渡り行く舟の

ほりかに見えんかゝるうぐれ

信春



師戸帰帆

信春

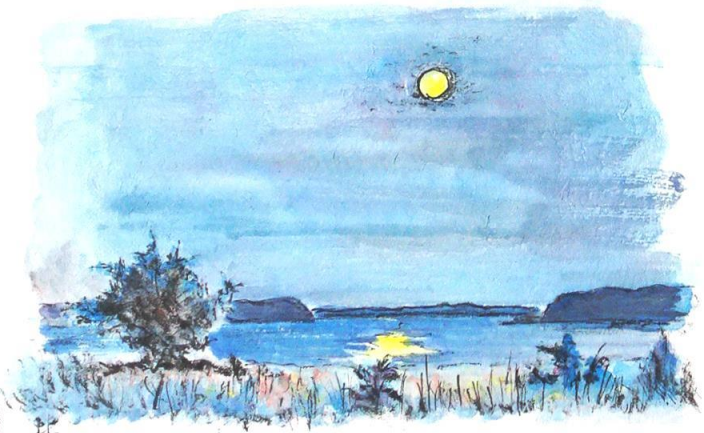
名録・白井八景

瀬戸の秋月

もちこりの西の湖もかくやらん

には照る浪の瀬戸の月かけ

信春



北谷

瀬戸の望む

名孫・白井八景

城巖夕照

いづ夕へ入日も峯に送るらん

むかし遠くなりの古跡

信齊



師子城跡より
社名

名跡・白井八景

光勝晩鐘

けふも暮れぬ あけ水 幾世をふる寺の

鐘 火をかりの音に 御音くらしん



後春

光勝寺より

名簿・白井八景

洲崎晴嵐

ふま松の雲も山嵐もなかりけり

洲崎の舟も波も静か

信春



白井城跡下舟るなり

景孫 印菴沼 臼井八景

元禄十二年（一六九八） 臼井秀胤（信春）作

洲崎晴嵐 すまき ふま松か雲は嵐もなかり洲崎にす波も静かに

城嶺魚 じょうりん いまへ自ら峰に送る之むかし遠く存れる石跡 いしあと

舟夜雨 ふねよ 漁する舟戸の夜の雨ぬれぬ網の纒手くるしき

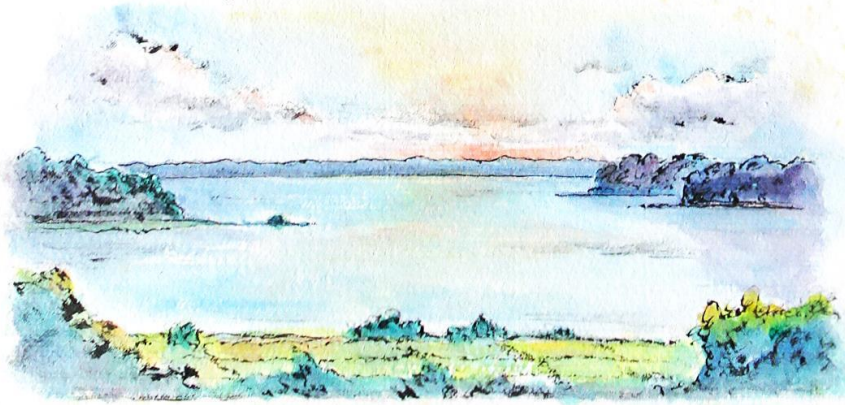
師戸帰帆 しろうと もろの師戸の渡行く舟のほかに見えぬ帰る夕水

瀬戸秋月 せと もろのしりの湖もかたはらには照る浪の瀬戸の月かけ

光勝晚鐘 こうしょう けふも暮れぬあはれ幾世もふる舟の鐘也昔も音響くらん

遠部落雁 とほへ 手を折れしひらふたつと教ふれはみちを遠部は法了雁か収

飯野著雪 いひの ふり積り雪の冬も見ぬ人かくと飯野のこころも雪もなし



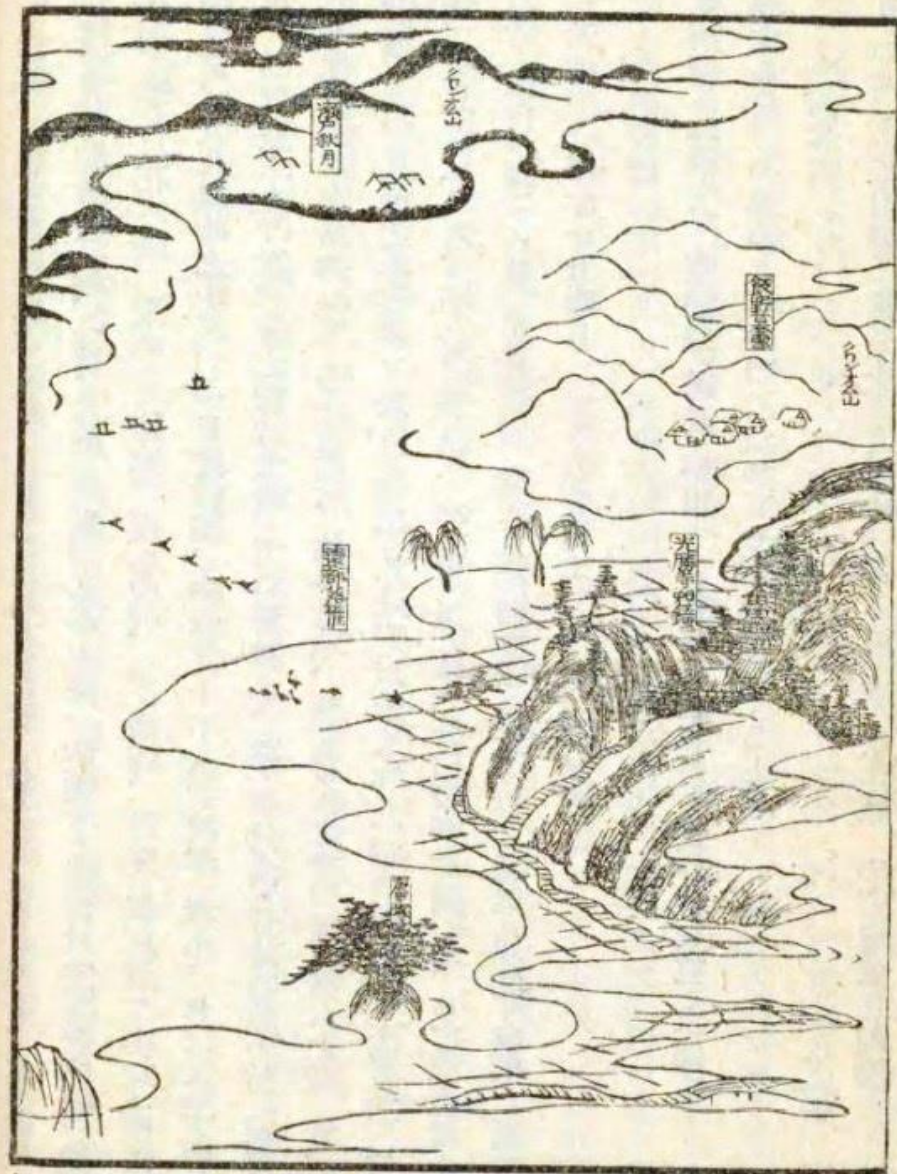
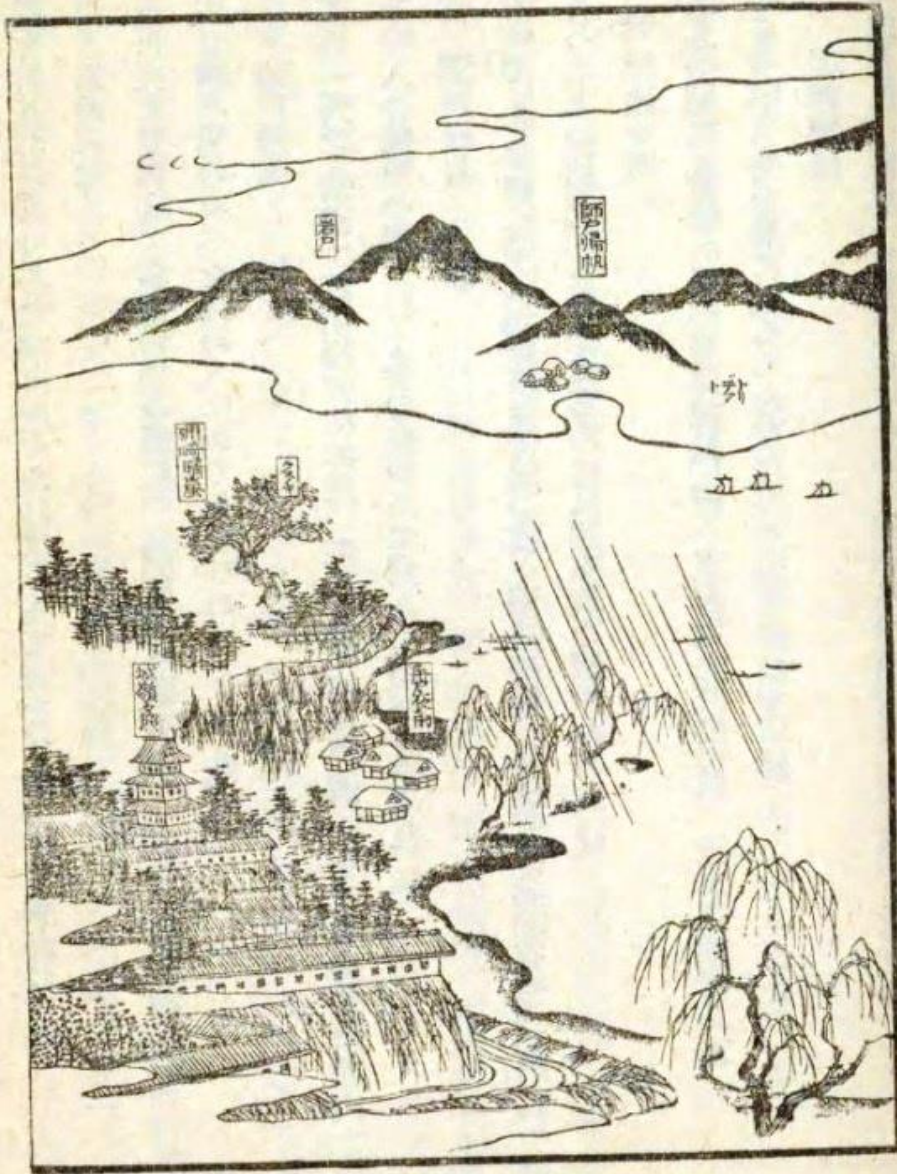
北

平成六年九月十五日 敬老日

佐藤博敏

七十六

参考：『利根川図誌』 「白井八景」



二十五。子息竹若丸僅に三歲、祐胤の弟胤氏(志津城主)、遺言によつて竹若丸の後見となる。胤氏始めは兄の遺言を守るといへども、忽ち逆心を生じ、私かに竹若丸を殺してみづから白井の城主とならん事を謀る。こゝにおたつといへる下女あり。はやくも此事を知りて、岩戸五郎胤安(印西岩戸の城主)に告ぐ。胤安大に驚き、自ら山伏の姿につくり、竹若丸を笈の中に藏し、潛かに逃れて鎌倉に去り、建長寺佛國禪師に養育を頼み、生長の後本領の地に歸らしめんと欲す。のち足利尊氏に屬して本領安堵せし白井左近將監胤興といひしは、この竹若丸の事なり。さて白井の城にては、下女のおたつ、後見胤氏の密謀を岩戸五郎に告げたる事顯はれしゆゑ、胤氏大に怒り、已におたつを殺さんとす。おたつ危くもその場をのがれ、私かに城をぬけ出で、印旛江のほとりなる芦原の中に隠る。胤氏あとを追ひかけ搜し求むれども曾てしれず。此時おたつ誤つて咳をしたりしかば、胤氏に見付けられ直に首を討たれしとなり。里人甚く是をあられみ、其所へ石の祠を建てて、これをおたつさまといふ。おたつ咳をおそるゝこと此故なり。依つて咳の念願かなふ事すみやか也といふ。

白井八景并序

下總國白井郷瑞湖山圓應禪寺者、中興城主平行胤有故所草創之精舎也。境地靈、景色絶、後負古城、喬木倚竹園邊、前抱湖水、閑鷗浴鳧浮游。晴好雨奇之有餘、日涉夜遊不飽。若試

謂之趣、東望飯野霽雪、西映舊基夕陽、浮萍斷、金玉流、瀨戸桂影、晴風吹、瑟瑟響、洲崎松聲。光勝疎鐘報暮、諸戸片帆促飯、沙平水淺、旅雁下、遠部秋、夜靜雨暝、漁翁擊舟、岸加焉、春待花不曙、夏納竹陰涼、遷喬鳥、答嶺蟬、秋愛楓林酒、冬和樵路之歌、曠野蚤寒汀鷺、大凡四時之佳興、一日之眺望、變態萬千不遑枚舉者也。僕投老于寺前、滯懷于湖水、已五年于茲矣。寺之僧の公者、方外舊識也。乘興共消日於吟境、訪寂復終夜於燈前。固遺世之樂、大且無窮。公常恨言、此多景地、無詩人之詩、無歌人之歌者、何其闕乎。若不補之、風流之罪也歟。於是遂賦八景、以示之。一唱則如坐夫勝地、信所謂有聲之畫也。後見此什一人、不可無詩、不可無歌。公曰請僕亦題之、見義豈默止。漫綴詩歌一以附佳作之後。自顧東施顰也。竊要餌蝦蟹一啖不可食者、以釣金鱗、所願在焉。時

元祿十一年十一月晦日

白井隱士

信齋叙

舟戸夜雨

夜雨蕭々舟戸天 深泥封路接平田
青燈耿々漁窓外 幾許浴鳧喧水邊
漁する舟戸の浪のよるの雨にぬれてや網の繩手くるしき

宋的
信齋

遠部落罵

亂行飛雁落田疇 蘆葉半凋遠部秋
貪了稻梁欲充饑 沙頭倦翼且踟躕

宋的

手を折りてひとつふたつとかぞふればみちてとをべに落つる雁がね

信齋

飯野暮雪

一丘突兀氣蕭森 多嶺青松半落陰 瓊屑紛々衰日暮 玉龍忽見偃波心
ふり積る雪の夕べを見ぬ人にかくといひのよことの葉もなし

宋的

師戸歸帆

布帆一幅泛清灣 萬頃煙波往亦還 潭面風休如鑄鏡 影分翠黛漬前山
もろ人の諸戸の渡り行く舟のほのかに見えてかへる夕くれ

宋的

信齋

瀬戸秋月

晴湖漂影月如流 殘漏惜光人倚樓 瀬戸清風今夜景 吹教我嘯洞庭秋
もろこしの西の湖もかくやらんには照る浪の瀬戸の月かけ

同

同

城嶺夕照

空見平湖與攢峰 昔年層閣總無蹤 孤城返照紅將斂 近市浮烟翠且重
いく夕べ入日を峰に送るらんむかしの遠くなれる古跡

同

同

光勝晚鐘

一遍宗風已儼然 星霜五百有餘年 鐘聲遙響孤雲外 知是稱名落日前

同

けふも暮れぬあはれ幾世をふる寺の鐘やむかしの音に響くらん

同

洲崎晴嵐

掃盡江山絶風議 朝來子細見洲崎 曝曬鷗鷺平沙上 交葉葦葭淺水濱
ふき拂ひ雲も嵐もなかりけり洲崎によする波も靜かに

同

同

跋

大凡有名無實者、異方景物也、茲吾關若門外瑞湖者、不滅瀟湘之佳趣、而永超洞庭之逸興
矣。然令古東夷之境、而冠蓋無題、題、縉素靡伸、雅情、故富景不富、句、登吟不登、興、
嗟乎蓋有實無名者乎。此故與信齋徵君、緒錄逸餘、裨補闕漏、而製作積而俱成、於燈前之
一軸。皆是翰林主人、子墨之客觀、不可得減默、者也焉。時

元祿戊寅之冬

盲龜子 爲之跋

鹿島橋 角來より佐倉田町へ架す。かしま川といふ。物井川の下流にして、是より東一里餘にし

て印旛江に入る。

物井川 佐倉風土記云、在印旛郡、二源皆出、土總國、一自野呂來、歷田谷當、北流十餘里
而至三坂戸。一自吉倉來、歷大谷流用草七曲巖富、西流十餘里而至三坂戸、二水相會入馬渡
橋下。又西北流六里爲物井川。出于小名木細流、過鹿渡亦會于此。而北流三里至羽鳥、